



アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』 (『綴織』)第8巻：全訳

著者	秋山 学
雑誌名	文藝言語研究．文藝篇
巻	66
ページ	87-115
発行年	2014-10-31
その他のタイトル	Clemente Alessandrino, Gli Stromati : libro VIII (traduzione giapponese)
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123578

アレクサンドリアのクレメンス
『ストロマテイス』（『綴織』）第8巻
—全訳—

秋 山 学

序.

初期ギリシア教父の一人、アレクサンドリアのクレメンス（150－215）の著作をめぐり、筆者は本学の紀要を借りてその全訳作業を進めてきた。すでに『プロトレプティコス』（「ギリシア人への勧告」；全1巻）、『パイダゴゴス』（「訓導者」；全3巻）に関しては訳出を終えている¹。クレメンスの主著に当たる『ストロマテイス』（「綴織」；全8巻）については、その第7巻まで2013年度内に訳出し終えた²。第8巻については従来、偽作でないとしても刊行を意図していないメモ書きだとされていたため、訳出すべきかどうか、しばし躊躇してきた。

ところで筆者は、2014年5月29日より31日まで、チェコ共和国東部の古都オロモウツ市にあるパラツキー大学キリル・メトディウス神学部にて開催されたアレクサンドリアのクレメンス国際学会第2回大会において、「アレクサンドリアのクレメンスによる聖書解釈における《しるし》の意味」と題する発表をイタリア語により行う機会に恵まれた³。この発表については、同大会の最終日の総括時に、『ストロマテイス』第5巻の詳細なテキストと注解の執筆者として知られるフランスのアラン・ル・ブリュエック教授から高く評価された。同学会は、2010年に発足したばかりの新しい学会であるが、これまでギリシア教父関係の学会といえ、オリゲネス学会（2013年8月にデンマークのオーフス大学において第11回大会を開催）、あるいはニュッサのグレゴリオス学会（2014年9月にローマのサンタ・クローチェ大学において第13回大会を開催）あたりしか知られていなかったのに対し、アレクサンドリアのクレメンスについても国際的な研究者の交流が行われることになったものであり、クレメンスの邦訳作業に携わってきた筆者としては、まことに感に堪えないものがある。本2014年度の大会では計15本の口頭発表が行われたが、筆

者はアジア圏から唯一の発表者であった。

さて上述のように、『ストロマテイス』の第8巻については、従来は他の7巻までとは扱いを異にする傾向がほとんどであったように思われる。実際、筆者の手許にあるピーニによる『ストロマテイス』のイタリア語訳には第7巻までしか収められていない⁴。けれども上掲のクレメンス学会では、当然のようにこの第8巻をクレメンスの著作のうちに含めて論じる傾向が強かった。チェコ人で、パラツキー大学教父学セクション総括責任者の立場にあるマティアシュ・ハヴルダ教授の発表では、従来の『ストロマテイス』第8巻に関して、その分量の少なさに着目し、クレメンスの他の著作『テオドトスの著作からの抜粋』(*Excerpta ex Theodoto*) および『預言者撰文集』(*Eclogae Propheticae*) と併せて『ストロマテイス』第8巻を構成するのではないかと、との新しい見解が示されたほどである⁵。

ハヴルダ教授の見解はさておき、従来の扱いでは、この第8巻は全体で33章より成る。第7巻までがいずれも100章を超える大部のものであるのとは趣を異にする。今回、本学紀要にはこの第8巻の拙訳を掲げ、筆者も新しい研究動向を追跡したいと考えるものである。

邦訳に際し、底本としてはオットー・シュテーリン (Otto Stählin, 1868 – 1949) の校訂になる校訂版テキスト (*Stromata Buch VII und VIII ; Excerpta ex Theodoto ; Eclogae Propheticae ; Quis dives salvetur ; Fragmenta / Clemens Alexandrinus ; herausgegeben im Auftrage der Kirchenväter-Commission der Königl. Preussischen Akademie der Wissenschaften von Leipzig: Hinrichs, 1909 ; Die Griechischen christlichen Schriftsteller der ersten drei Jahrhunderte; Clemens Alexandrinus, Bd. 3*) を用いた。なおルートヴィヒ・フリュヒテル (Ludwig Früchtel) らの改訂になる1970年の第2版については参照していないが、典拠箇所指示の充実が図られたものと思われるので、教文館版(「キリスト教教父著作集」)刊行のための見直し作業の際に活用したい。近代語訳としては、上述のように、筆者が日頃愛用しているイタリア語訳 (Clemente Alessandrino, *Gli Stromati: Note di vera filosofia*, Introduzione, traduzione e note di Giovanni Pini, Milano 1985) には第8巻分の伊訳が収録されていないため、主にミーニュ版のラテン語訳を参照した。近代語訳としては英訳 (*The Ante-Nicene Fathers vol.2: translations of the writings of the fathers down to A.D. 325*, eds. A. Roberts & J. Donaldson, Edinburgh 1885, pp.558-567) がある (ただ同書の脚注にも「この巻は断片で、論理学の不完全

な叙述に過ぎず、『ストロマテイス』の一部を成すとは考えられない」といった趣旨のことが記されている。ibid., p.558). 各章の冒頭に掲げた内容小見出しは、ラテン語訳あるいは英訳から適宜採用したものである。

1. 哲学的なあるいは神学的な問題に携わる人々はすべて、 真理を発見すべく努めることが肝要であるということ。

1.1) けれども哲学者たちのうちで最も古い人々は、一体全体われわれが本当に真なる哲学に携わっているのかどうか、ということに関して、疑念を抱いたり迷ったりすることはなかったと伝えられている（フォティス『図書総覧』111）。それはとりもなおさず、われわれには聖書が発見のために、精査に向けて探究するよう促しているためである。2) というのもギリシア人たちの哲学者たちのうち比較的新しい世代の者たちは、空しく不完全な名誉欲のために、無用な戯言へと詭弁的にまた論争目的で逸れていった。それに対して逆に異邦の哲学は、あらゆる争いを排除して、「探せ、そうすれば発見するであろう。叩け、そうすれば開かれるであろう。求めよ、そうすればあなた方に与えられるであろう」（マタイ7,7）と述べている。3) 探究に際し、質問と回答に向かうロゴスは、真理の扉を現象に即して叩く。しかるに精査によって障害となるものが開かれるならば、知識に基づく観想が成立するからである。2.1) わたくしが思うに、このようにして叩く者たちには、求めているものが開かれ、聖書に従って問いを投げかける者たちには、彼らが赴く事柄が神から与えられる。つまりこれは、神からの賜物である覚知（gnōsis）が、真にロゴスに従ったかたちでの探究が光を放つとき、把捉できるかたちで与えられるということなのである。2) というのも、探究しない限り、発見することは不可能である。精査しない限り、探究することは不可能である。さらには、問いかけによって、探究している事柄を明確なかたちにしない限り、精査することも開陳することも、解き明かすことも不可能である。さらにはあらゆる吟味をもって歩みゆくことなしには、それ以降、報い、すなわち探し求めている事柄の知識を手にすることはできない。だが、探し求める者には発見することが可能である。3) しかるに探し求める行為は、それ以前には「知らない」と思っていることによって可能となる。ここから人は、渴望に駆られて美なるものの発見に向けて思慮深く探し求め、勝利や名誉への欲求とは無縁に探索し、自問自答し、語られている事柄自体にも考察の目を向けるのである。4) というのも神

の書ばかりでなく、共通する概念に依拠して探究を行い、発見が成し遂げられた際に、何らかの有益な終了へと至るのが相似つかわしいことだからである。5) というのも異質な場所や群衆などは、人々の発する混乱した特殊な発見譚を受け容れるのに対して、真理の熱求者にして思慮ある者は、探究に際しても平和的であることが相応しいからである。それは、知識にあふれた論証を通じて非自己中心的かつ真理愛に満ちた形で、把捉的な覚知へと歩みを進めるものである。

Ⅱ. 哲学あるいは神学に携わる人々はすべて、真理を発見すべく努めるべきだという前言に関して、それはまず、事柄そして名の明瞭で正確な定義をもって到達可能であるということ。

3.1) さてそのような教えの根源に遡るうえで、次のような方法、すなわち、提示された名に対し、すべてその同意語を追跡するという仕方でその名を説明するような方法よりほかに、何かもっと優れた明確なものがあるだろうか。一体、たとえば「ブリテュリ」というような、単に音だけの語彙で、何も意味しないような名前は、論証のために何か資するのであろうか。2) またどうして哲学者や弁論家、そればかりでなく陪審員が、意味のない名を論証のために持ち出すということがあり得るだろうか。あるいはだれか裁かれる側の人物が、意味されている事柄を存在しないものとし、認識できないということがありうるだろうか。哲学者たちは、さまざまではあるにしても間違いなく、論証を基底的なもの (hypostaton) として提供するのであるから。3) ところで、何であれ探究している事柄に関して、もし人が正しく把捉したならば、同族にして同義なるすべての語彙において同意されている事柄を呼び名の上で指し示すこと以外には、ロゴスを他の同意された根拠へと引き上げることはすまい。4) したがってしかる後、そこから鼓舞され、その意味される事柄が、ロゴスが関わっている事柄なのかどうかについて探究を続けることが不可避である。さらには引き続いて、もしそれがそうであるということが示されたならば、その事柄の本性をめぐり、それがいったいどういうものであるのかについて、正確に探さねばならない。その際、与えられた秩序を決して踏み越えることは許されない。

4.1) さて、探究している事柄に関して、その思われる事柄を単に述べることで、それだけでは決して十分ではない (というのも、望んでいる事柄につい

で、逆の立場から等しく表明することも可能なのであるから）。むしろ、語られた事柄を信じさせるというプロセスが必須である。それはもし同じように、異議を唱えられた事柄に対してそれに対する裁きが下されたり、あるいは逆に、同じように異議を唱えられた事柄が別にあつたりした場合がそれにあたる。これは無限に行われることであろうし、もし、万人によって同意されている事柄に対し、同意されていない事柄に対する信憑性というものが提示されるならば、逆に実証されないということに陥るであろう。したがってこれを教説の初めに行っておかねばならないのである。2) したがって、すべて提示された名というものは、同意され、かつ考察を共にする人々に明らかな言い方 (logos) へと置き換える必要がある。そしてそれは、教説の初めともなれば、探究される事柄の発見をも主導することになるだろうものである。3) ここで、太陽という名辞を提示することにしよう。ストア派の人々は、これは「海水でできた思惟上の照る物体だ」（偽プルタルコス『哲学者の自然学説について』889f.）と言っている。だがこの言い方は、名辞そのものよりも不明瞭なものではないだろうか。もしこの言い方が真実であるとすれば、他の証明を必要とするであろう。だから、一般的で明白な言い方を用いて、太陽を「天の下に行き交う物体のうち、最も明るいものだ」（プラトン『ティテイス』208D）と名づけるのがより優れた言い方である。というのも思うに、この言い方のほうがより信憑性があるし、明瞭で、万人に等しく同意してもらえるからである。

Ⅲ. 論証の定義づけに関して.

5.1) まったく同じように、論証とは次のようなものであるということに関してすべての人々が同意するであろう。すなわち論証とは、疑いを抱かれている事柄に対し、同意のなされている事柄から発して信憑性をもたらす言表である、と。2) しかしに論証や信憑性や覚知ばかりでなく洞察 (prognōsis) もまたさまざまな仕方で語られ、知識をもたらす確固たるものについてそう言われるのに対して、単に期待を抱かせるだけのものもある。3) したがって、最も優勢なる論証というものは、学べる人々の靈魂に知識を伴った信心を注入するものであるが、臆見による論証とはこれとは異なるものである。たとえば「真なる人間」と呼ばれるのは、共通の考え方や思いを獲得した人であるが、野卑にして獸的な人間というものも存在する。かくして喜劇作家も次のように言うわけである。

「人間であるとは何と喜ばしきことか。いやしくも人間である限りにおいて」(マントロイ断片 484 ケレ)。

4) 牛や馬、犬に関しても、その動物の卓越性や悪徳に関して、同じことが当てはまる。というのもその種の完全性に目を向けるならば、われわれは意味される事柄の最も優勢な面に至りつく。5) すなわちわれわれは「医師」というものを想起するとき、医術の技量に関して全く欠けたところのない人物を思うのであるが、覚知者を思う場合にも、知識に関わる見識について全く不足のない人を想起するのである。

6.1) さて立証 (endeixis) が三段論法的証明 (syllogismos) と異なるのは、立証される事柄が、一つの事柄を明示しそれが一にして同一のものだという点にある。たとえばわれわれは「妊娠している」ということを「すでに処女でない」ということの立証として述べる。しかるに三段論法的なあり方をとったものは、一なるものが多数の事柄に付き随う。たとえば「デルフォイはピュザンティオンの人々を裏切った」というような場合がそうである (デモステネス 7.20 ; 18.136 ; アイスキネス 2.125)。もしそうであるのなら、明らかにする証拠は、一つではなく複数取り上げられることになるからである。2) また三段論法とは、同意された事柄から推論すること (perainein) を言う。これに対し、真実なる事どもから推論することが論証 (apodeiknyein) である。したがって立証の益というものは、次の二つのものの言わば合成物だと言える。すなわちそれは、求めている真実に加えて得られるものを得ることにより、またそれらに随順する結論 (symperasma) を付随させることにより得られる益である。3) ただしもし、先立つものが先頭に立たず、あるいは第二のものがそれに随順しない場合、論証ではなく、三段論法の証明を用いたということになる。4) すなわち、固有の結論を仮説 (lemma) に対してもたらすことは三段論法的証明に過ぎないのに対して、仮説の各々が真実なものとして先頭に立つのは三段論法的証明のみならず、論証でもある。5) 一方推論とは、名前から明らかなどおり、終結 (peras) に至らしめることである。各々の言表には、少なくとも探索している終結が存在するが、それが実に、結論と呼ばれるものである。6) 単純にして第一の言表は、たとえ真実であったとしても、決して三段論法的証明とは呼ばれない。それはむしろ次の三つの最小なる合成物であって、そのうちの二つは仮説であり、うちの一つは結論である。

7) すべての事柄は、あるいはそれらのうちの信頼に足る事柄は、論証を必要とする。7.1) だがもしそのうちの前者である場合、われわれがもし、各々

の論証に対して論証を求めるならば、無限へと遡源し、かくしてその論証は逸脱することになろう。だがもしその第二のパターンである場合には、それらのうちの信頼に足る事柄そのものが、論証の端緒となることであろう。まさしく哲学者たちは、万物の端緒は論証不可能であるということに関して合意している（アリストテレス『分析論後書』84b28）。2) その結果、もしいやしくも論証であるならば、それはすべて、まず何らかそれ自身のうちに信憑性を有するものであることが必須である。これこそ第一にして論証不可能なものと呼ばれる事柄である。すべての論証は、論証不可能な信（*pistis*）に向けて止揚される。3) しかるに信に発する源泉の後には、論証の他の端緒もまた存在することであろう。それは感覚また思惟に明瞭に映る事柄である。4) というのも、感覚に生起する事柄というものは、単純にして解体不可能なものであるのに対し、思惟に関わる事柄は、単純にして論理的かつ第一のものである。ところがそれらの双方より生み出されるものは、合成物である一方で、第一の事どもに比して劣ることなく明瞭であり信憑性に満ち、かつ論理的である。5) そしてそれ以降のものが対立した場合、それを判別する力というものがあり、それはわれわれが本性的に有している、ロゴスそのものに備わった力である。6) かくしても、すでに信憑性をもった事柄から、いまだに信憑性を得られていない事柄に対して信憑性を付与することができるような言表が何か見出されるなら、それこそ論証の本質そのものであるとわれわれは言うことであろう。7) しかるに信と論証との類は二種であると言われる。それは、片や聞き入る者たちの靈魂に確信をもたらすもの、片や知識をもたらすものである。8) したがってもしある人が、間隔と思惟にとって明白である事柄から出発し、しかる後固有の結論を付与するとすれば、彼は真の論証を行っている。一方、憶測に基づく事柄（*endoxos*）のみから出発し、それが第一の事柄ではない、すなわち感覚にも思惟にも明瞭ではないとすれば、彼が固有の結論を付与した場合、それは三段論法的証明を行っているのであって、知識に基づく論証を行っているのではない。また固有の結論を導き出すのでなければ、原因を三段論法的に証明しているのですらない。

8.1) さて、論証（*apodeixis*）は分析（*analysis*）とは異なる。というのも、論証される事柄は各々、何か論証される事柄を通じて論証されるのであるが、それらもまた、他の事柄から前もって論証されるものであって、われわれは遂に、それ自体から信じうる事柄、ないし感覚また思惟にとって明瞭な事柄に至るまで遡源することであろう。これが分析と呼ばれるものである。一方論証と

は、人が第一の事柄から、中間に存するあらゆる事柄を通じて探究される事柄へと到達する方法のことである。2) したがって、論証に携わる人は、真理を表す仮説に関して大いに先慮を働かせる一方、名辞に関してはこれを軽んじることが不可欠である。それは、これを人が「公理」(axiōma)あるいは「前提」(protasis)あるいは仮説と呼ぼうと、みな同じことである。また同様に、何らか先言措定された事柄について何か結論づける場合、まったく同じように多く先慮を働かせることが必須である。それはこれを「結論的言表」「結論言表」「三段論法的結論」などと、あまり思慮を働かせずに名づけようと望む場合でも、まったく同じことである。3) つまりわたくしが言いたいのは、すべてに関して次の二つの事柄を用いて論証的な言表を守る必要があるということである。すなわちそれは、真なる仮説を獲得することと、それらに対して随順する結論を付与するということである。この結論のことを、ある人々は「結語」(epiphora)とも呼んでいる。仮説に対し、結びとして付加されるからである。

4) 探究される事柄に関してはすべて、各々の問題について異なった仮説を必要とする。それは提起された問題に固有の仮説であって、その提起された問題は、言表(logos)へと変換されることが必要である。またこの言表は、すべての人々に同意されたものであることが相応しい。5) しかるに問題に固有でない仮説が取り上げられた場合、その論証が美しく三段論法的に証明されることは受け入れられない(シュヴァルツの提唱する補足読みに従う)。むしろその問題全体の本性が知られなければ、何事も発見することができない。これが探求(zētēma)と呼ばれるものである。6) したがって、探求される事柄すべてにおいて、何か予め知られている事柄が存する(それは信憑性を持つ事柄として、まったくそれ自体から、論証を必要とせずに信じられるものである)。これは、それらの問題の探究に際しての誘因、また発見されると予期される事柄の判断基準とされるべきものである。

IV. あらゆる問題の説明に際して、まず論じられる事柄の定義がなされるべきであり、それは用語に関してしばしば起こる曖昧さを避けるためであること。

9.1) 探索(zētēsis)はすべて、先立つ覚知(gnōsis)から見出される。というのも、すべて探求されるものに先立つ覚知は、単に知られていない働きの本質にかかわる場合がありうる。たとえば石や植物、動物などに関して、その

エネルゲイアをわれわれが知らない場合がそうである。あるいは受動性や力、また単純に言ってしまえば、事物に関わる事からの一つである場合がそうである。2) しかるに、時としてそれらの力や受動性のうちの何か、また次のようなもの、たとえば靈魂の欲情や情動といったものの何かを認識するということ、その本質を知らずに追究することであるという場合がある。3) だが多くの事柄にあっては、われわれの思惟それ自体が、これらのものを自らのもとに置く際に追究が成立するが、それはいったいいかなる本質にかかわる場合なのであろうか。4) というのも本質にせよエネルゲイアにせよ、いずれにしてもその想念を考え（*dianoia*）のうちに取り込むことで、われわれは探求に乗り出すのであるから。5) したがってわれわれは、それらのエネルゲイアを目にしながらも、その本質とともにその偶発性（*pathēma*）については無知であるということがありうる。

6) したがって、発見の方法は次のようなものとなる。まずは問題そのものを判別する（*gnōrizein*）ことそれ自体から始めねばならない。7) 実に、しばしば起こることだが、表現の形式が、考えを欺いたり、混乱に陥れたり、動揺させたりし、その結果、いかなる相違からそれが成り立っているかを容易に発見することのできないことがありうる。例えば、胎内に抱かれているものは動物であるかどうか、といった問題がそうである。8) というのもわれわれは、動物また胎内に抱かれているものに関して何がしかの観念を抱きつつ、「胎内に抱かれているものは動物であるのかどうか」という問題に関して探求を行うのであるが、それは取りも直さず、「運動と感覚の能力を持つということが、胎内に抱かれているということの本質に関わるのか」という問題に他ならないからである。9) かくして、前もって知られている本質をめぐる探求が、エネルゲイアや受動性に関わるものとなるのである。10.1) かくして提題者は、いったい何をもって動物と呼ぶのであるのかを、直ちに尋ね返す必要がある。というのもとりわけこれを行うべきであるのは、名辞が異なった用いられ方に供せられるのをわれわれが知っているためである。また究めておくべきなのは、名称によって意味される事柄が、異議の生じうることであるのかそれとも万人によって合意された事柄であるのかという点である。2) すなわちもし人が、成長し、ないし育まれるものであればこれを動物と呼ぶというのであれば、逆にわれわれは、その人が植物をも動物と考えるのかどうか、加えて尋ねるべきだからである。そうすればその人はこれに答え、懐妊するもの・成長するもの・育まれるものがそうであるということをはっきりとすることが必然だ

からである。3) というのもプラトンは、植物を動物と呼びつつ植物が「靈魂の第三の種に属す」(プラトン『ティマイステス』77Bほか)と呼んで、それがただ靈魂の欲情的部分に与かるだけの存在であると主張した。これに対してアリストテレスは、植物は植物的で生育的な靈魂に与かると考えている(アリストテレス『靈魂論』413b7ほか)。だがこれを動物と呼んでしまうことに対しては、認めていない。というのも彼は、これとは別の感覺的靈魂に与かるものだけが「動物」と呼ばれるに値するものだと考えているためである。4) 実際ストア派の人々は、植物的な力を「靈魂」と呼んでしまうことを認めない。5) しかるに「植物もまた動物である」とする提題者がこれを主張するとすれば、われわれは、彼が自己撞着を起こしている事柄を述べているということを示そう。というのも彼は、動物を「育まれ成長する」ということでもって定義づけながら、「植物は動物ではない」と主張するのであれば、彼は育まれ生育するものが、動物であると同時に動物ではないと述べているに他ならないように思われるからである。6) では彼が何を学ぼうと望んでいるのか、述べてみるがよい。いったい、胎内にあるものは生育し育まれるものであるのか、それは何らかの感覺に与かっているのか、何らかの衝撃による運動に与かっているのか。7) というのもプラトンによれば、植物は靈魂を有する動物であるのに対し、アリストテレスによれば、植物は決して動物ではない。なぜなら植物は、すでに靈魂を有するものではあっても、そこには感覺器官が欠けているからだという(アリストテレス『トピカ』135a18)。実に彼によれば、動物とは靈魂を有し感覺器官を有する実体なのである。8) しかるにストア派によれば、植物は靈魂を有してもしないし、動物でもない。なぜなら動物とは靈魂を有する実体なのであるから。11.1) したがって、もし動物が靈魂を有するものであるというのであれば、靈魂とは感覺器官を有する本性であり、靈魂を有するとは、すでに感覺器官を有することであるということは明らかである。

2) さて実に、質問者が、胎内にいるものは動物であるのかどうかと尋ね返した場合、育まれ成長するものを動物と呼ぶのだと答えたとすれば、それは回答を得たことになる。しかしながら、答えてほしいのは次のことだ、と言ったとしよう。すなわち「胎内に抱かれているものが、すでに感覺器官を有するのか、何らかの衝撃によって自らを運動させるものであるのか」と。すでに究明されている問題は、明らかになっている。名辞をめぐる迷妄は、もう残存していないからである。3) そこで彼が、尋ね返された事柄に対して返答せず、彼の考えていることが何であるのか、あるいはいかなる問題のゆえに「動物」と

いう名辞を付与して前提を行ったのであるかを述べようとせず、われわれ自身で解釈せよと命ずる場合、彼が論争的な性格であることが判明するであろう。

4) だが次の二様のあり方が存するとしよう。それはまず、質問と回答に関してのあり方であり、もう一方は説明のあり方であって、一方が拒否されるという場合である。その場合、われわれが説明するなら、その問題に関わる事柄すべてを聞くがよい。われわれが説明を尽くしたならば、そのとき彼は、個々の事柄一つ一つに関して、詳細に扱うことができるようになるであろう。12.1) だが説明を聞くや、それを中断しようと試みるようであれば、彼が聞くことを望んでいないということは明らかである。

2) だがもし、彼が回答することを選ぶとすれば、すべてに先がけて彼は、動物という名がいかなる内実（pragma）を指しているのか、それを尋ねなければならない。それに対して答えがあったならば、続いて彼は重ねて、懐妊するとは、また胎内とはいかなる事柄を意味しているのかを尋ねなければならない。すなわち、いまだに形成されつくしていないもの、あるいは胎内に放出された精子のことを、この名によって意味することを望んでいるのか、それともはっきりと有機的な単位を成し、すでに形成されたもの、つまり「胚」を意味しているのか、ということである。3) これに回答が行われた際に、当該の問題に対してはすでに結論が画され、引き続いて学ばねばならないことにもなろう。

4) しかるにもし、彼がわれわれに対して回答することを望まないならば、次のことをよく聞くがよい。「あなたは、自分が提示した事柄によって、何を意味しているのかに関して（わたくしはこの言い方で、意味されている事柄について表現しているのではなく、すでに事物そのものについて検討を始めているのだ）、述べようと望まないのだから、あなたは言わば「犬は動物であるか」というのと同じような提題をしたのだ、ということを知るがよい」と。5) というのも、わたくしはおそらくこう言うであろう。「どんな犬（kyōn）のことか。つまり、陸地に棲む犬のことか、海のサメのことか、天界の星座の「犬座」のことか。そればかりでなく、ディオゲネス率いる犬儒派のことか、あるいはここでは省略するが、まだ他の犬のことだろうか、というのも、あなたがすべての犬について尋ねているのか、ある犬について尋ねているのか、それを予知することは、わたくしにはできないからだ。6) あなたが後ほど行うであろうこと、それがどのようなものについてであるのかを、あらかじめ学び知っておくようにあなたは求めているのだ。だから明瞭に答えたまえ。7) だがもしあなたが、名辞について思いめぐらすなら、「懐妊されたもの」という名辞自体

が、それが動物でも植物でもないということを全面的に明らかにしている。つまり、名辞・音声・実体・存在・本質・そしてすべてが、動物であるということを超えるものなのである。もしあなたがこういったことを表明していれば、あなたはすでに回答を得ているのである」と。

13.1) さて、「懐妊されたもの」という名辞によって意味される事柄は、動物ということではなく、むしろ非実体的で、語られ得るものであり、事物で、観念で、すべて、動物であるということを超えたものである。2) それは何か、動物の本性とは異なったものであろう。つまり、事柄そのもの、すなわち胚の本質ということであるが、これが探求される際、それが一体何であるのかが明瞭に示されることになる。「動物」という名辞によって意味される事どもに関することは、また他の問題として存する。3) そこでわたくしは次のように言おう。もしあなたが、感覚能力と衝動による運動能力を有するものを動物と呼ぶのであれば、動物とは単に衝動によって運動し感覚するものというだけのものではない。4) というのもそれは、静寂を保つことさえもできるからであり、感覚器官がなければ感覚能力がないというのとは異なる。しかるに衝動を被ったり、感覚能力を働かせたりできるということは、本性的に動物の徴である。5) というのもこれらの事どもによって意味されるのは次のような事柄だからである。すなわちまず、もし懐妊されているものが、すでに感覚を働かせたり、あるいは衝動によって運動を起こしたりすることができるとすれば、それは現前して看取することができるということである。第二には、もし懐妊されているものが、いつの日か、感覚を働かせたり、あるいは衝動によって運動することができるようになるのであれば、その意味されているところは明瞭であるのだから、だれもそれに関して尋ねたりはしないということである。6) しかるにまずもって探求されるのは、胚がすでに動物であるのか、それともいまだに植物であるのかという点であり、次には動物という名辞が明らかになるように、動物という名辞が転用されて言表に供されるということである。7) しかるに感覚において、あるいは衝動による運動において、それが非動物とは異なるものであるということを見出すなら、われわれは、それに先立つ諸問題から次の事柄を定義づけることになる。それはまず、いまだに感覚器官も有さずまた運動することもないようなものが、可能態 (dynamis) において存在するとわれわれは言いうるのかどうか、という点である。そのような性質のものは、いつの日か存在することになる。一方、エネルギーすなわち現実態においてすでにそのようなものとして存在するものがある。そのうちのあるものは

すでにエネルギーを有しているのに対し、あるものは現実態と化することは可能であるにしても、現在は平静を保っているか、休眠しているというタイプのものがある。8) これこそが、探求していた事柄である。というも胚は、育まれるという点において動物であると述べられるべきではない。それは探求してきた事柄の本質からは逸脱する事柄に属すからである。それは、別の仕方でも偶発的に生ずる事柄に注意を向ける場合の話である。

14.1) さてすべて、発見されたと述べられる事柄に関しては、共通して論証が構築されている。これは、何か他の事柄から他のことを信頼できるものにする言表である。2) その事柄から、探究されている事柄を信じられるものにし、尋ね学ぶ者が合意し認識するに至る必要がある。3) しかるに、これらのものすべてに関わる原理は、感覚と思惟とに関わる明晰さである。実に第一の論証は、これらの事柄によって構成される。一方すでに先立って論証された事柄から、同一の論証を通じて、さらに他の何かを結論づける論証は、先立つ論証に劣ることなく信憑性に満ちたものであるものの、こちら第一の論証だと名づけることは不可能である。なぜなら、第一の前提に発して結論づけられたわけではないからである。4) したがって、探究される事柄の差異の第一の種は、三つのあり方において示される。それはすなわち、実体が認識されている場合に、その実体の業ないし属性 (pathos) の何かが知られていないということ、第二には、問題の相違が存在するということであって、われわれはその業と属性に関しては皆知っているものの、その実体については知ることがないという状況である。たとえば、身体の中のどの部位に靈魂の主導的部分が存するのかといった問題である。V. 15.1) さて、論証を手掛けること (epicheirēsis) それ自体が、第三の問題点に関わる。ある人々は、一つの動物のうちに、複数の原理が存在するということはある得ないと述べる。実に、同質の原理が複数、一つの動物のうちに存在するということはある得ないが、種においてそれらが異なるということ是不合理ではない。

ピュロン派に対する論駁。

懐疑派のエポケー（判断停止）に対する論証の適用。

2) もし判断停止 (epochē) が、確実なものは存在しないと述べるとすれば、判断停止は、自らより始めつつ、まず最初に自らを否定することになる。3) 従って判断停止は、何か真理が存することを認め、すべてに関して判断を停止

することはしない、と言っているのか、あるいは、何事も真理ではないと述べながら、留保をしているのかのどちらかである。明らかなのは、この判断停止ということが、予め真理を語ることはない、ということである。4) というのもこの判断停止は、真理を述べるものであるか真理を述べないものであるのか、そのどちらかである。もし真理を述べるとすれば、何か真理が存在するということを耳にしつつ、これを認めていることになる。一方もし真理を述べないとすれば、判断停止が除去しようと望む事柄は、真理であることを放棄することになる。5) というのもそのうちにあっては、除去に向かう判断停止が虚偽であるということが示されるからであり、そこでは除去された事柄が真理であることが示される。たとえば「<すべての夢は偽りである>と語る夢」のような場合である。6) というのも、自らに対して除去的である判断停止は、他の事柄に対しては支配的だからである。もし総じて判断停止が真理であるならば、その判断停止そのものから端緒を起し、他の事柄に対しては判断停止を行わず、自らに対してまず行うべきであろう。

7) さて次に、もしある人が、自分が人間であること、そして自分が疑っているということを認めるならば、彼は疑っていないということが明らかとなる。8) いったい、すべての事柄に関して疑いながら、初めからして議論に至りつくことがどうしてできるだろうか。また、問いを受けた事柄に関してどうして返答することができるだろうか。9) このことからして、彼が疑っていないということは明らかである。実に、彼は疑っているという素振りを見せているだけである。それゆえ、もしそれらのことどもに信頼を置きながら、すべての事柄に関して疑うべきであるというのであれば、われわれはまず、この判断停止ということ自体について疑ってかかることになるだろう。この判断停止を信頼すべきであろうとなかろうと。

16.1) さらにもし「真理を知ることにはできない」ということが真理であるとするならば、そもそも端緒からして、何かそこに真なるものが与えられるということが否定される。だがもし彼が、「真理を知らないということさえも議論の余地がある」と言うのであれば、その発言自体のうちに、真理は知りうるものだということを認めていることになる。この発言において、彼はこの件に関する判断停止を窮めていないと思われるのである。

2) 異端選択 (hairesis) とは、教説の偏向である。あるいはある人々によれば、互いにまた現象に向けての連関性を包括する幾多の教説によって、よく生きることを向けて鼓舞する偏向である。そして教説とは、いわば論理性に基づ

く把握であり、把握とは想念の性向そして合意である。

3) 判断停止派のみならず、すべての教説家は、何らかの事柄において判断停止を行うのを常としている。それはたとえば、考えの弱さゆえの場合もあれば、問題の不明確性ゆえの場合も、あるいは表現の等価性ゆえの場合もある。

VI. 探求の推論法と端緒は、何に関してまた何において 見出されるのであるか。

定義、類および種について。

17.1) さて実に、定義 (horos)・論証・分割 (diairesis) に先立ち、探究の対象がどれだけ多様に語られるかを提示しなければならない。同名語を扱わねばならないし、同意語に関しては、その意味にしたがって明瞭な仕方でも提示せねばならないのである。2) しかる後探究せねばならないのは、当該の問題が、他の事柄に向かう事どものうちに属すのかどうかについてである。もし、それが自体的に取り上げられるのであれば、それらに加え、それが存在するかどうか、それは何であるのか、何がそれに付随するのかを、一方他の事柄に向かう事どものうちに属すのであれば、それが存在するかどうか、それは何であるのか、それは何のためにあるのかを探究せねばならない。3) これらをめぐる観想に際しては、その各々の事柄をめぐる、および普遍的なレベルでの覚知が併せて主題となるべきであり、そのどちらが先であるか、あるいはそれらの相違点をめぐる分割も問題とされるべきである。4) したがってまず帰納法は、普遍と定義とをもたらし、分割は種と本質、そしてそして個体をもたらし。一方どれだけ多様に語られるかをめぐる観想は、固有の事柄をめぐる三段論法の小前提をもたらし、問題提起 (diaporēsis) は、その提起による相違点と論証を、さらには別の仕方により、観想およびその観想に相伴う事柄を併せ増し高めることになる。そのすべてから、知識と真理とが提供される。逆に、分割から総括される事柄が定義となる。5) というのも、定義は分割に先立って捉えられるのに対して、後には論理的定義 (diorismos) が捉えられるからである。先立つ場合とは、合意が行われるかもしくは提示がなされる場合であり、後になる場合とは、論証が行われる場合である。6) また感覚に基づいて各々のものに関わる事柄から、普遍が総括されることになる。というのも、帰納法 (epagōgē) の端緒は感覚であり、その結論は普遍だからである。7) かくしてまず、帰納法が示すのは、それが何であるかではなく、それ

が存在するか存在しないかである。それに対して分割は、それが何であるのかを提示する。8) また論理的定義は、分割と同様に、本質 (ousia) およびそれが何であるのかを教えるものであり、それが存在するのかどうかを告げるものではない。また論証は、次の三つすなわち、存在するのかどうか、それが何であるのか、それは何ゆえに存在するのか、についてである。一方、原因を包含する定義もいくつか存在する。

18.1) さてわれわれは、原因を知るときに、知識を持つことができる。その原因とは4種である。すなわち質料因、運動因、形相因、目的因である。したがって論理的定義も4通りとなるであろう。2) したがってまず、種を捉えねばならない。そのうちには、上なる事物の中でも最も近くに存するものがある。その後、隣接する相違がある。だが、諸相違の連続性が絶たれ、分割されたとき、それは何であったのか(実体)を満たすことになる。3) しかるに述べる必要があるのは、各々のものの相違すべてではなく、むしろ類を成立せしめる相違点である。4) 幾何学的な分析と統合は、弁証法的な分割と定義に似ており、われわれは分割からより簡便なそして主導的なものへと進みゆく。5) 実に、探求している問題の種を、われわれは、そこに内在する類へと分解する。たとえば人間に関して、われわれはこれを動物の種であるとして外界に現れる諸々の類へと分解する。それは、死すべきものであるか、もしくは不死なるものであるかという具合である。こうしてわれわれは常に、複合的であると思われる種をより簡単な類へと切り分け、探求しているものへ、そしてまたはや切断を受容しないものへと至るのである。6) というのもわれわれは、動物を死すべきものと不死なるものへと分解し、しかる後死すべきものを陸上のものと水中のものに分け、さらには陸上のものを有翼のものと歩行性のものとに分ける。こうすることによって、探求しているものにふさわしい類(それは探求しているものをも包含する)を分解し、もっとも簡単な類へと切り分け、そこに至り着く。これは他のものを交えず、ただそれのみで、探求しているものを包含するものである。7) すなわちわれわれは、歩行性のものをさらに理性に与かるものと非理性的なものへと分解する。しかる後、分解を通じて取り出された諸類の中で、人間に適わしいものを選択し、一つの言表へと統括して、人間というものの定義を提示するのである。すなわち人間とは、死すべき、陸上に棲む、歩行性の、理性的な動物である。

19.1) ここから分割は、定義に対し、質料の秩序を加える。それは、名辞の単純性を追求しつつ、作り手・創造者の定義が加えられながら、存在者に関する

る覚知を備え、提供するものである。2) 定義とは、事柄自体ないしイデアに属すものではない。なぜならわれわれは、普遍的な概念を抱いている事柄に関しては、解釈学的な言表はその概念に属すと言うからである。分解もまた、これらの概念に属すものとなる。3) しかるに分解のうちのあるものは、種として分解されたものを類へと分解するものであるのに対し、そのあるものは全体として諸部分に分解し、またあるものは、付帯的なものへと分解する。4) 実に、部分への全体の分解は、大抵の場合大きさに関して想定される。しかるに付帯的なものへの分解は、決して全体として捉えられうることはない。それはたとえ、諸存在物の各々に対して、実体が必ず存在せねばならないにしてもである。5) ここから、これら二つの分解はいずれも不適格なものだということになる。ただ唯一適格性をもつのは、類への種の切断である。この切断を通じて、種に関する同一性、および固有の相違に基づく異種性が特徴づけられる。6) 類は常に、何らかの部分において看取されるが、もしあるものが何かの部分であれば、そういうことには決してならず、それもまた類となるはずである。というのも手は人間の一部分であるが、決して類ではない。7) また種は類のうちに存する。というのも動物ということ、人間のうちにも牛のうちにも存するが、全体が部分のうちに存することはありえない。なぜなら人間が両足のうちに存することはないからである。8) それゆえ類は部分よりも主導的であり、種に述語づけられる限りの事柄は、すべて類にも述語づけられることであろう。

20.1) かくして最上なのは、種を二つの類に、または三つの類に分解することである。かくして、より本来的な仕方で類へと分解されたものは、それ自体とそれ以外のものによって特徴づけられ、しかる後、本来的な仕方で意味づけられた事どもを通じて分解されたものが特徴づけられる。2) というのも類の各々というものは、実体であるか（ちょうど我々が次のように述べる場合である。「諸事物のあるものは実体であるが、あるものは非実体である」）、量・質・関係・場所・時間・状態・所持・能動・被動のいずれかだからである。3) かくして、何であれある事柄のすべてを知悉している者が誰かあったとすれば、彼はその事物の定義をも与えることができるはずである。しかるに何であれ、それを言葉でもって把握しかつ定義づけることのできない者は、その知悉者となることはないであろう。4) ところで、定義を巡る無知から、幾多の疑念や迷妄が生じるということが起きる。5) というのももし、事物を知悉しその姿を思惟において把握している者は、彼が思惟している事柄を言葉によっ

でも明らかにすることができるであろう。しかるに思惟の解釈が定義なのであり、事物を知れる者は、その定義をも与えることができるというのが必然的なことなのである。

21.1) さて、差異もまた、定義によって加えて把握される。差異は定義によって、意味の秩序を区切り取るからである。実に、人間の定義に「笑う」というものが加えられるならば、その全体は「理性的で、死すべき、陸生で、歩行性の、笑う動物」ということになる。2) というのも意味とは、固有の事柄のうち、差異に従って定義に加えてもたらされるものだからである。しかし事柄そのものの本性をそのうちには示さない。差異とは、固有性の付加であると言われている。3) そしてちょうど、差異を有しているものは、その他のすべてのものに対して差異を有する際に、その差異とはその事物だけに存し、定義のなかで、その事物に関して相互に述語づけられるものである。第一の種を主導的かつ基層的なものとして受け取ることが必須である。4) かくして、より長大な定義にあっては、10個の範疇により発見された多数の類が、それに対し最も簡潔な定義にあっては、適当な類を導くものとして取り込まれたものが、事物の実体と本性を明らかにする。しかるにもっとも簡潔な定義とは、三つのものから成立する。それは一つの種と、最も不可欠な二つの類である。ただしそれは簡略化 (syntomia) によって成立する。5) したがってわれわれは、人間とは「理性的な、笑う動物である」と言う。かつ特別な付帯的事項は、定義された事柄に加えて取り上げられねばならない。それはすなわち、その固有の卓越性、あるいはその固有の業、あるいはそういった他のものの業である。6) かくして事物の本質の解説的な定義は、事物の本性を正確に把握しつつこれを無力化する。その一方で、最も力のある類を通じては、本質を明瞭化することを行うのに対して、定義は量のうちには、ほとんど本質を有さない。

VII. 疑念あるいは同意の原因に関して。

22.1) さて、判断停止をさせる原因は、最も上位にあるものとしては二つがある。まず一つ目は、人間の見解 (gnōmē) の多様性と浮動性である。これは本性的に、互いが互いに対してであれ、あるいは自らが自らに対してであれ、見解の不一致を生む基である。一方第二には、諸存在における見解の不一致がある。これがおそらくは判断停止を引き起こすことにもなってきたのであろう。2) というのもわれわれは、幻想に関して、相互の衝突 (machē) のため

に、これをすべて信ずることはできない。またわれわれは幻影に関して、すべてそれらを信じないわけにもゆかない。「すべての幻想は信じがたい」と述べる幻想も、すべての幻想のうちにあり、すべての幻想という表現のうちに記し入れられているからである。また、ある幻想に関してはこれを信じ、ある幻想に関してはこれを信じないというのは、同様性のためになしえない。したがってわれわれは判断停止を余儀なくされるというわけである。3) しかるに判断停止をもたらすこれらの最も主要な事どものうちで、あるものは、見解の不確定性が見解の不一致を生み出し、またこの見解の不一致が判断停止の直接的な原因である。ここから人生は、裁判所と陪審院と集会に満ちているのであり、総じて、良く語られた事どもと悪しく語られた事どもをめぐり、選択と回避が生じるのである。これらの事どもは、疑念に陥った思惟 (*dianoia*) の産物であり、対立する見解の同様の力へと思惟が傾いていることの証拠である。4) しかるに、書庫は書物に満ち、類別と問題化のあり方は、教説において不一致を見る諸見解に満ちている。それらの諸見解は、自分たちこそが、諸存在の内なる真理を認識していると信じ込んでいるのである。

VIII. 事物と名を分類する方法.

23.1) 音声に関しては、三つが挙げられる。名辞 (*onomata*) は、先に考えられたことに従っての、しかし先言措定に対してはその連関に従っての、想念の象徴である。第二に、想念 (*noēmata*) は、先言措定の類事物と刻印化 (*ektypōmata*) である (ここから、すべての事物に関して想念は同一のものである。これは、すべてに関してその先言措定からは同一の刻印 (*typōsis*) が生じるが、名辞に関しては決してそうはならず、これは異なった方言のゆえであるためである)。そして第三には、基層事項 (*hypokeimena pragmata*) がある。これによってわれわれには、想念が刻印されるのである。2) 実に名辞は、文法学によって、24 文字より成る普遍的な文字へと還元される。というのも文字は、定まったものであるべきだからである。なぜなら、各々に関して諸存在物が無限であれば、それらに関して知識は存在しえないし、知識の固有性は、普遍的にして定まった観察 (*theōrēma*) に立脚すべきものだからである。ここから、各々のものに関する個別性は、普遍性へと止揚される。3) それに対して、哲学者たちの問題意識は、想念そして先言措定に向けて下降の道筋をたどる。しかるにこれらの中で、各個物は無限であるが、それらに対して

も何らかの文字・要素 (stoicheia) が見いだされるなら、それらのもとに、探求されるものの全体が集約される。4) そしてもし、一つのもしくは複数の要素のもとに還元されるように思えるなら、われわれはそれが存在すると表明するであろうし、逆にすべてが霧消するようであれば、我々はそれがどこにも存在しないということであろう。5) 語られる事物のうちで、あるものは連関性 (symplokē) とともに述べられるが、それはたとえば「人は走る」のような用例の場合である。一方ある事どもは連関性なく語られる。それはたとえば、「人間」とか「走る」のような場合、あるいは言表を完成しない場合や、真偽性を有しない場合などである。6) しかるに連関性とともにでなく語られる事物のうち、あるものは実体を意味し、あるものは質を、あるものは量を、またあるものは関係を、あるものは場所を、あるものは時間を、あるものは状態を、あるものは所有を、またあるものは能動を、またあるものは受動を表すといった具合であり、われわれは諸存在物の要素は、質料のうちに原理とともにあると述べている。というのもこれらの事どもは、言表によって観想されるものだからであるのに対して、非質料的な事物は、最初の接触の時点から、ただ理性のみによって把握されるものだからである。

24.1) さて、10 個の範疇の下に述語づけられる事物のうちで、あるものは、例えば 9 つの範疇のように自体的に語られるが、あるものは関係として語られる。2) さらに、これら 10 個の範疇の下に語られる事物のうち、あるものは類義語 (synōnyma) である。たとえば、牛と人間とは、動物であるから類義語である。つまり類義語とは、それらの双方に名 (「動物」) は共通であり、言表 (すなわち定義) も同一であり、その実体は、生命を有するもの、ということである。3) しかるに異義語 (heterōnyma) とは、同一の先言措定をめぐる、異なった名のうちにあるもののことを言う。たとえば「上昇」と「下降」がそうである。つまり道筋としては、上向きであれ下向きであれ、同一だからである。4) しかるに、異義語の別の類としては、たとえば「馬」と「黒い」がある。これらは、名も言表も、互いに異なったものを有し、先言措定を共有することもない。これらは「異語」と呼ぶべきであって「異義語」ではない。5) 「多義語」(polyōnyma) とは、同一のロゴスを有しながら、名は異なるもののことを言う。たとえば「刃」「剣」「刀」のような場合を言う。6) 「派生語」(parōnyma) とは、何か他の語からまた別の語が名づけられる場合である。例えば「勇者」が「勇気」から派生する場合がそうである。7) しかるに「同名異義語」(homōnyma) は同一の名詞を用いるが、ロゴスとしては同一のもの

を持っていない。たとえば「人間」すなわち動物としての人間と、書き記された「人間」の場合がそうである。8) また同名異義語のあるものは、偶然によって同名異義となっている場合がある。たとえばロクリス出身のアイアスと、サラミス島出身のアイアスの場合がそうである。また同名異義語のあるものは、概念上同名異義である場合もあり、そのうちのあるものは、類似性に基づく。たとえば動物としての「人間」と、書き記された「人間」の場合がそうである。それに対して類比によって同名異義の場合もある。たとえば、「イダ山の脚」(ホメロス『イリアス』20.59) という場合と、われわれの「脚」という場合がそうで、これは「より下方の部分」という意味による。これに対してその働きによる場合があり、たとえば「船の脚」すなわちそれによって船が航行する部分を指す場合と、われわれの脚、すなわちそれによってわれわれが運動する部位を指す場合がそうである。9) 同名異義語と呼ばれるのは、同一物からそういわれる場合と、同一物との関係でそう言われる場合とがある。たとえば医師の「書物」と「メス」(smilion) とは、ともに「医術的」と呼ばれるが、これは、医師が用いるもの、という意味と、医療的な働きを持つ、という二つの意味を持ち合わせているのである。

IX. さまざまな原因の種類について。

25.1) さて原因 (aitia) のうち、あるものは直接的 (prokatartika) な原因であるが、あるものは本質的 (synektika)、あるものは協働的 (synerga)、またあるものは、不可欠的 (hōn ouk aneu) なものである。2) まず直接的原因というものは、何かが成立するためにまずもって端緒を提供するような場合である。たとえば、性愛に関して抑制の利かぬ者に対する美のようなケースである。というのも美が彼らの目に映るや否や、彼らのうちに性愛的な性向を形成し、それは何ら強いられてのものではないからである。3) 一方本質的原因とは、類義語的に「独立的」とも呼ばれるものであって、それら自体によって、自足的に結果をもたらすという性質のものである。4) 次いで、あらゆる原因が、それを学ぶ者に対して示されねばならない。まず父は学びの上での直接的原因であり、学徒は本質的原因、学徒の資質は協働的原因、そして時間は不可欠的な理を提供する。

5) しかるに、すぐれて「原因」と言われるのは、何かを現実態的に提供するものである。たとえばわれわれは剣が「切断力を持つ」と言うが、それは切

る場合に限らず、切らない場合においても同様である。したがって「提供的」とは、すでに現実態化させているということばかりでなく、いまだ現実態化していないくても、現実態化させるための可能態を行使していることをも意味するのである。

26.1) かくして、原因は実体に属するという人もあれば、非実体に属するという人もある。またある人々は、実体とはすぐれて原因であると言い、非実体が原因であると言われるのは誤用によるもので、いわば因果の関係だとする。だが別のある人々は逆に、この関係を逆転させ、非実体的なるものこそすぐれて原因であると述べ、実体が原因であると言われるのは誤用によるものであるとして、例えば切断とは非実体的な現実態であり、切ることの原因であるが、その際に現実態は非実体的なものであるとする。また切断とは切られることの原因でもあって、刀剣と切られるものがどちらも実体であるのと同様の関係にあるという。

2) 「あるものの原因である」という言い方がなされるのは3種のあり方による。それはまず、原因であるものに関して語られる。たとえば彫刻家のような場合である。次に、何かあるものの原因である場合、そのあるものに関して語られる。たとえば彫像が成ることにに関して語られる。さらには、何かあるものに原因がある場合、そのあるものに関して語られる。たとえば質料に関して言われる場合がそうである。つまり青銅とは、彫像が成ることの原因である。3) したがって、成ることと切られることにに関して、その原因であるものは、現実態であるがゆえに非実体的である。

4) 諸原因は、いかなる論拠によって「述語づけられるもの」(katēgorēmata)に属すのか、それとも、ある人々が言うように「語られるもの」(lekta)に属すのか(というのもクレアンテスとアルケデモスは、「述語づけられるもの」のことを「語られるもの」と呼ぶのであるから)。あるいはむしろ、諸原因のうちのあるものは、たとえば「彼は切られる」に関して、その不定格(ptōsis)は「切られること」であり、これは「述語づけられるもの」に属すと言われるのに対して、あるものは、たとえば「船が成る」に関して、その不定格は「船が成ること」であり、こちらは「公理」(axiōma)に属すと言われるのであろうか。ちなみにアリストテレスならば、「呼称」(prosēgoriai)に属す、と言う。呼称とはたとえば、「家」「神殿」「燃焼」「切断」のようなもののことである。しかるに、不定格は非実体的であるということが同意されている。5) それゆえかの謎々(sophisma)は次のように解決される。すなわち「あなたの語

る事柄は、あなたの口を通して出てくる」。これは真実である。したがって「あなたが《家》と言うとき、その家は実際に、あなたの口を通じて出てくる」。これは虚偽である。というのもわれわれは、「家」と言うとき、それを実体として述べているのではなく、非実体的な不定格として述べているのであって、「家」とはこの不定格に属すものなのである。

27.1) さて、建築家が家を建てることとわれわれが言う場合、それは、将来起こるであろう事柄との関連性(anaphora)によるものである。同じようにわれわれは「外套が織り成される」と言う。なぜなら「為す」とは、現実態を明らかにすることだからである。2) 「為す」ことがある人に属し、原因がまた別の人に属すということとはあり得ず、同じ人に属すのである。なぜなら、成ることの原因が何によるのであるか、それによって、その原因が成ることを生成させるのであるのだから。かくして原因と生成因(poiëtikon)とは同一である。3) またもし、何かある事柄が原因であり生成因でもあるとすれば、それは必ず目的因(di'ho)でもある。だが何かある事柄が目的因であるとしても、それは必ずしも原因であるとは限らない。実に、多くの事柄が一つの成果(apotelesma)に帰着し、それらの事柄によって目標が達成されることがあるが、そのすべてが原因であるとは限らない。4) というのもメディアは、もし憤らなかったなら、子を殺していなかったであろう。もし嫉妬心を抱かなかったなら、憤っていなかったであろう。もし恋に墜ちなかったなら、嫉妬心も抱いていなかったであろう。もしイアソンがコルクス人たちの許へ航行していなかったなら、メディアが恋に墜ちることもなかったであろう。もしアルゴ号が建造されていなかったなら、イアソンが航海に出ることもなかったであろう。もしペリオン山から材木が切り出されていなかったなら、アルゴ号も造られていなかったであろう。5) これらすべてのうちに、目的因は見いだされるが、それらすべてが子殺しの原因ではありえず、子殺しの原因はメディアただ一人なのである。

6) 阻まないものは、非現実態的である。それゆえ阻まないものは原因ではなく、原因とは阻むものである。すなわち、現実態化するもの・何かを為すもののうちに、原因が想定される。28.1) さらに、阻まないものは成るものから分離され(実にこの故に、阻み得るものは存在しないということが完遂される)、原因は成るものに対して分かつたれる。かくして阻まないものは原因とはなり得ない。

2) 原因は4通りに語られる。まず為すもの(作出因)、たとえば彫刻家がそうである。次に質料因、青銅がこれに当たる。さらに形相因、特徴がこれに

当たる。そして目的因、ギウムナジウムの長に対する敬意がこれに当たる。3) 「これなくしてはあり得ない」というもののロゴスは、ギウムナジウムの長が成るに当たって青銅がこれを有しており、これもまた同様に原因である。というのも、それなくしては成果が成り立ち得ないというものはすべて、必然的に原因なのであるが、単に原因であるというだけでは留まらない。それなくしては成り立たないというものは、本質的 (synektika) ではなく、むしろ協働的 (synerga) である。4) すべて現実態的なものは、被動物の側の適合性が伴う場合に成果をもたらす。つまり、まず原因が配し、各事物は、自然本性的にそれに適っている事柄に向けて被るのであるが、その際に適合性というものは促進する働きを持ち (parektikos)、それなくしては成り立たないというもののロゴスを提供するのである。5) かくして原因は、適合性なくしては何ら働きを為さず、原因ではなく協働的なものと化すが、これはすべての原因が、為すことにおいて考えられるためである。大地は自ら自身を創ることはないのだから、自らの原因ではないであろう。6) だが、燃烧の原因が火ではなく木材だと言ったり、切断の原因が刀剣ではなく肉体だと言ったり、競技者が投げ飛ばされる原因が、相手の力ではなく競技者本人の非力のためだと言ったりするのは笑止千万なことである。

7) さて、本質的原因は時間を必要とはしない。というのも焼き印は、肉体に据えられると同時に、苦痛をもたらすからである。直接的な原因のうちのものは、成果が現れるまでに時間を要するが、あるものは時間を要しない。たとえば骨折の場合がそうである。これらの事柄が「時間を伴わない」と言われるのは、何か時間が欠如するためではなく、弱体化するためであって、これは「突然に」と言われる場合も同様であり、これらの出来事も、時間を伴わずにでき上がったものではないのである。

29.1) すべての原因は、原因として二重の観念によって捉えられる。なぜなら原因は「何の原因か」ということと「何との関係での原因か」ということの二面性において考えられるからであり、まず「何の」ということは、「いかなる成果の」ということであって、たとえば刀剣が、切断することの原因であるような場合がそうである。一方「何との関係での」ということは、「相性を持てるものとの関係において」ということであって、たとえば火が木材との関係において原因であるような場合がそうである。2) 原因は、関係性のうちにある事どもに含まれる。なぜなら原因は、他の事物との状態において想定されるからであり、したがってわれわれは、原因を原因として考えるために、二つ

の事柄を思い浮かべることになるのである。

3) さて、創世者と創り主、および父のロゴスは同一である。自らの原因である何かも、自らの父である誰かも存在することはない。なぜならそうすると第一のものが第二になるだろうからである。原因であるものが働きまた措定し、原因によって成るものが被り措定されるのである。4) しかるに自らの許に取り込まれた同じものが働くと同時に措定されるということとはあり得ない。子である存在が同時に父であるということは不可能である。5) さらに原因は、それによって生じたものに比して、本質的に時間の上で先立つ。すなわち刀剣は切断に先立つのである。だが同一のものがそれ自体として、時間的に質料の上で先立つということは、原因である限り不可能である。同様に、遅れたり、時間的に後になったりすることも、原因の働きである限りにおいてあり得ない。6) 存在することは、成ることとは異なる。同様に原因は、成ったものとは異なり、父は子とは異なるのである。なぜなら、同一のものがそれ自体として、存在すると同時に成るということを受け入れはしないからである。したがって何もかも、自らの原因であるということはない。

30.1) 原因は、相互に互いの原因であるということではなく、互いがそれぞれに原因を有している。というのも癰癰持ちの性質は、先立って存したところで熱の原因となることはなく、ただ熱が出ることの原因となる。一方熱が先立って存しても、そのまま癰癰となることはなく、癰癰の性格が増し加わることの原因となる。2) 同じように諸々の徳は、相互に、その連関関係(antakolouthia) ゆえに分離されないことの原因である。それゆえ天井に置かれている石は、相互に、「留まっている」という述語の原因であるが、それら相互にとっては原因ではない。一方教師と学ぶ者は、「進歩する」という述語の原因である。3) しかるに「相互に原因である」と語られるのが、まず同一の事物についての場合がある。たとえば貿易商とラクダは、相互に、利益を上げることの原因である。一方、互いに別々の事柄についての場合もある。たとえば刀剣と肉の場合がそうである。なぜならまず刀剣は、肉に関して「切られる」ことの原因である。一方肉は、刀剣に関して「切る」ことの原因である。

4) 「目には目を」(レビ 24,20) そして「生命に対しては生命をもって」(レビ 24,18) と言われることに關して。

まず、ある人を死に至らしめるまで殴った者の場合、その者は相手の死の原因であるか、もしくは死が生じることの原因である。しかし、その相手によってその者が死に至るまで殴り返された場合、その者は相手を、逆原因

(antaitios)として有することになる。ただしそれは、相手にとってその者が原因となったような仕方ではなく、異なった原因によるのである。5) というのも、その者は相手にとって死の原因となったのであって、その者に対して死に至らしめる傷を返報したのは、死ではなく、先に傷を受けた者である。したがってその者は、他者の原因とはなったが、他者を原因として有することになる。また、他者に対して不正を働く者は、不正を被った者にとっての原因となるが、同罰をもって罰せられるよう命じている律法が不正に立つのではなく、それはある面では報復の意味で、またある面では教育の意味で設けられていることである。したがって、諸原因は、原因としては相互に関わることがなく、ただそれぞれ相互に原因が存在するのである。

31.1) もし、多数の事物が一に向けて集うことを通じて原因となるのかどうか探求されるならば、原因は多数存するということになる。なぜなら、人間が乗り込みすぎれば、船が沈む原因となるからである。だがその各々が個々原因であるわけではない。むしろ、もし何か共なる原因 (synaition) となる原因がないのであれば、他のものとの共在によって原因となる。だが次のように言う人々もある。それは、もし原因が多数存するのであれば、各々のものは個々に一つの事柄の原因となるのだ、という説である。2) 実に「幸福であること」は一つの事柄であるが、その原因は、多数存する卓越性だということがままある。また、暑くなったり、苦痛を覚えたりすることに関しても、同様に原因は多数存する。3) したがって、幾多の卓越性が、可能態においては一つであり、それが暑くさせる要因となったり、苦痛をもたらし要因となったりするのではないだろうか。また一方、多数の卓越性が、その類としては一であるがゆえに、幸福であることという一つの事柄の原因となるのであろう。4) だが、一つの事柄に対して真に直接的な原因となるのは、類・種あわせて複数のものである。まず類として何であれ「病に罹る」ことの原因となるのは、たとえば寒気、熱射、疲労、不消化、酩酊などであり、一方種としては、それらは「発熱」の原因である。5) 一方、本質的な原因となるのは類に関するものに限られ、種に関わるものは決してそうならない。たとえば、芳香を放つことの原因となるのは、類に関してそれはただ一つの事柄であるが、原因は多数に及ぶ。たとえば乳香、薔薇、サフラン、安息香、没薬、香水などである。というのも、薔薇は没薬と同じような芳香を放つわけではないからである。

32.1) 同一物が、相異なった事物の原因となるということは、原因の大きさおよび可能態 (働き) による場合と、それを被る側の適合性による場合とがあ

る。2) まず、可能態がどのようなものかによる場合。同じ弦が、緊張なり弛緩なりによって、高いあるいは低い響きを発する。次に、被る側の適合性による場合。蜜は、健康な者には甘く感じられるが、熱のある者には苦く感じられる。また同一のぶどう酒が、ある者を憤らせる一方、ある者を快活にさせる。また同じ太陽が蜜蠟を溶かす一方、粘土を乾かす。

4) かくして原因のうち、あるものは極めて明白であり、推論(epilogismos)によって捉えられるものであるが、あるものは不明瞭であり、類推によって把握されるものである。5) さらに、不明瞭な原因のうち、あるものは一時的に不明瞭であり、一時的にその意味が隠されたものとなっているのであるが、別のものはその意味が再度明瞭なものに映ることのあるものである。一方、不明瞭な原因のうち、本性的に不明瞭なものもあり、それらはいかなる機会にも明瞭とはなり得ないものである。6) そして本性的に不明瞭な原因のうち、あるものは把握可能であるので、ある人々はこれを不明瞭ではないと呼ぶ。なぜなら、諸々の徴を通じて類比的にこれを捉えることができるからである。たとえば、理性を通じて観想される道筋の均整性がそうである。一方本性的に不明瞭な原因のうち、あるものは把握不可能なものである。これは、いかなる方法によっても把握されることの不可能なものである。これこそまさしく、何にもまさって「不明瞭な原因」と呼ばれるものである。

7) さて、ある原因は直接的(prokatartika)、ある原因は本質的(synektika)、またある原因は付随的(synaitia)、ある原因は協働的(synerga)である。またある原因は本性に従うもの、ある原因は本性に反するもの、ある原因は病気に由来するものである。また従属による原因のうち、あるものは被動性の原因、あるものはその大きさの原因、そしてあるものは時間と機会によるものである。

33.1) さて直接的な原因が取り除かれても、ある成果は残る。その際、原因は本質的な場合があり、その原因が存している場合には成果が残るが、原因が取り除かれれば成果も取り除かれる。2) ところでこの場合、「本質的」という表現は、「自足的」(autoteles)とも呼ばれ、同意語とされることがある。なぜならそれ自体で自足的に、成果を作り出すからである。3) しかるにこの自足的な原因は、自足的な現実態を明らかにするものであるが、協働的な原因は、仕えるあり方と、他者を相伴っての奉仕を意味するものである。4) したがってもし、何物も提供されることがなければ、決して「協働的」と呼ばれることはない。一方もし何物かが提供されるならば、その提供された物に対しても、

つまりその物によって生じる事柄に対しても、必ずその原因となる。5) かくしてこの物は、それが存在する際には成果が成立するような事柄の、協働的原因である。つまり、明瞭なものが存する場合には明瞭なものにとっての協働的な原因となるのに対し、不明瞭なものが存する場合には、その不明瞭なものにとっての原因となる。6) また「付随的な原因」とは、類の上では諸原因に属するものである。たとえば「共なる兵士」は兵士であり、「共なる壮丁」は壮丁である。7) かくして協働的原因は、本質的原因に対し、それによって成立する事柄の拡充 (epitasis) の上で助力する。これに対して付随的原因は、同一の概念に立つものではない。なぜなら付随的原因は、たとえ本質的原因が何も存在していなくとも、付随的でありうる。8) というのも、付随的原因は他物とともに想定されるが、その他物とは、単独では成果を生み出すことのできないものだからである。9) しかるに協働的原因が付随的原因と異なるのは、付随的原因が、単独では成果を提供することを為しえない他物とともにあるのに対し、協働的原因は、単独では何ら為すことなく、むしろ単独で為す他物の許に赴いてそれに協働し、成果がより激しいものとなることに力を貸すからである。とりわけ、直接的原因から協働的原因が発する場合、協働的原因が、原因の働きを拡張することに寄与する。

注

- 1 「アレクサンドリアのクレメンス『プロトレプティコス』(『ギリシア人への勧告』) 一全訳一」, 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』57, 1-82, 2010.3; 「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴーゴス』(『訓導者』) 第1巻一全訳一」, 同『文藝言語研究 文藝篇』59, 1-62, 2011.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴーゴス』(『訓導者』) 第2巻一全訳一」, 同『文藝言語研究 言語篇』59, 1-74, 2011.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『パイダゴーゴス』(『訓導者』) 第3巻一全訳一」, 筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室刊『古典古代学』第3号, 25-76, 2011.3.
- 2 「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマティス』(『綴織』) 第1巻一全訳一」, 筑波大学人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』63, 63-163, 2013.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマティス』(『綴織』) 第2巻一全訳一」, 筑波大学人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 言語篇』63, 147-223, 2013.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマティス』(『綴織』) 第3巻一全訳一」, 筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室刊『古典古代学』第5号, 27-93, 2013.3, 「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマティス』(『綴織』) 第4巻一全訳一」, 筑波大学大学院人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 文藝篇』65, 2014.3, アレクサンドレ

- イアのクレメンス『ストロマテイス』第5巻（上智大学中世思想研究所編訳／監修『中世思想原典集成1 初期ギリシア教父』283－416），平凡社，1995.2，「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）第6巻—全訳—」，筑波大学大学院人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 言語篇』65，2014.3，「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）第7巻—全訳—」，筑波大学大学院人文社会科学研究科古典古代学研究室刊『古典古代学』第6号，35－113，2014.3. ただし第5巻については，訳出時からかなり時間が経過しているため，今回この第8巻の拙訳と同時に改訳を企図している．「アレクサンドリアのクレメンス『ストロマテイス』（『綴織』）第5巻—全訳—」，筑波大学人文社会系文芸・言語専攻紀要『文藝言語研究 言語篇』66，57－148，2014.10 刊行予定．
- 3 M. Akiyama, “Il significato di “segno” nell’interpretazione biblica di Clemente Alessandrino”. なお大会の公式サイトは，<http://www.centrum-texty.upol.cz/patristickaspolecnost/clement2014foto.htm> である．
 - 4 Clemente Alessandrino, *Gli Stromati: note di vera filosofia*, Introduzione, traduzione e note di G. Pini, Milano, Edizioni Paoline, 1985.
 - 5 M. Havrda, “Clement’s exegetical interests in Stromata VIII”.